２０１６／０２／２８　　礼拝メッセージ　近藤修司　牧師

主　　題：敵であるサタンの敗北　６
聖書箇所：黙示録１３：１－２

黙示録１３章をお開きください。
きょうは１３：１から見て行くのですが、１２：１８を見ると、「**そして、彼は海べの砂の上に立った。**」とあります。１２：１８は新解約聖書の第二版には確かにあるのですが、第三版には１８節がありません。欄外に、「**異本には『私は……立った』とし、１３：１に入れる**」という説明がされています。つまり写本の中にこれが記されているものとそうでないものがあるということです。
この１８節に出て来る「**彼**」とは、文脈を見るとこれは「**竜**」、つまりサタンです。そこで何が言われているのかというと、一つ言えることは１２章と１３章は非常に関連したものであるということです。レオン・モーリスという神学者は、「**海べの砂の上に立った**」ということに関してこういう説明を加えています。「竜自身が光景をじっと見つめているものである」と。１２章はさまざまな「**竜**」、サタンの行動が記されていました。そのサタンがじっと光景を見ている様子、この１３章に記されているさまざまな出来事も実はサタンが関係していることを私たちに教えてくれています。天での戦いの場所を失い、自分の最期が近いことを悟ったサタンはこの世において最後のあがきをもってこれまで以上に危害を、迫害をもたらそうと努めるわけです。サタンはこの世の神として創造主なるまことの神にみずからが逆らい続けるだけではなく、すべての人間が同様に逆らい続けることを望んで、誘惑を与え続けていると。
Ｆ．「海からの獣」　１３：１－１０
・「サタンの継続した妨害」
この１３章は黙示録の中でも非常に中心的なところです。バークレーは１３章に関してこんな説明を加えています。「地上に災害をもたらすためにその権限を二つの獣に委譲する。この二つの獣がこの章の主役である。サタンはこの獣を自分の代行者とし、これを通して地上に邪悪な働きをしようとしている。」と。確かに１３章を見ると２匹の獣が出て来ます。１匹は海の中から、もう１匹は１２節にあるように、地から上って来ると。この２匹の獣というのが１３章の中の中心的な教えです。なぜこの２匹の獣が出ているかというと、今バークレーが言ったように、この２匹の獣を用いてサタンは彼自身の計画をなそうとしているのだということです。１２章、そしてこの１３章もサタンは自分の計画をなそう、そして神の計画を何とか台無しにしようと働いている様子が記されているわけです。
１．「海」：
まず最初に「**また私は見た。**」と記されています。ヨハネが新たな幻を見たことが最初に記されています。どんな幻かというと、「**海から一匹の獣が上って来た。**」とあります。この「**海**」とは一体何のことなのかです。私たちはこの「**獣**」というのが象徴だということを何度も見て来ました。そのことからもこの「**海**」というのもきっと象徴ではないのかと私たちは思うわけです。
この「**海**」に関して、ジョン・ワルボード先生はよく知られている二つの説を挙げています。ワルボード先生のことばを使って紹介しますと、「この海とは大群衆である。つまりこの獣はこの世の異邦人の勢力の中から起こってきたことを意味していると取られている」と。この「**海**」というのは大群衆であり、しかもこの世の異邦人の勢力の中からこの「**獣**」が出て来たことを表しているのだという説です。もう一つは、「**海**」ですから地中海のことだろうと言うわけです。「**獣**」は地中海の地域から出て来ることを指していると取る説。恐らく「**獣**」は異邦人であるという点と地中海の地域から出て来るという点において両者とも正しいであろうと、ジョン・ワルボード先生は言います。これが一般的に「**海**」に関して信じられている説です。
次は私たちの解釈です。確かに黙示録１７：１５を見ると、この「**海**」というのが今見て来たような大群衆であったり、異邦人国家を象徴しているように思えます。ここには「**御使いはまた私に言った。『あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群衆、国民、国語です。**」とあります。確かにこの世のさまざまな国家、さまざまな国々を指しているように見ることができるのです。しかし、最初に見たように、この「**海**」というのは、文字どおりの海ではありません。その理由は、最初にもお話ししたように、ヨハネが象徴をもって語っているからです。
またこの「**獣が上って来**」るというのは、実は初めて出て来たのではなくて、黙示録１１：７に「**そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が**」という表現がありました。また１７：８にも同じように「**獣が上って来**」る様子が書かれています。「**あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。**」と記されています。ですから大群衆、異邦人の勢力の中から出て来るのではないかとか、地中海の地域やその沿岸の場所から出て来るのではないかという説は確かにある

のですけれども、今私たちがこのみことばを見た時に、この「**海**」というのは恐らく「**底知れぬ所**」であろうと。「**底知れぬ所**」というと、すべてではありませんが、罪を犯した特別な悪霊たちが閉じ込められているところです。またこの「**底知れぬ所**」というのは、悪とか悪霊たちの力のみなもとであると言われています。これはもう私たちが１１章で学んで来たことです。こういった結論を引き出す理由というのは、実はレオン・モーリス先生が言うように、古代世界において悪はしばしば海と結びつけられています。そしてこのようにみことばを見た時に、この「**獣**」は「**底知れぬ所**」、罪を犯した悪霊たちがまだ閉じ込められているようなところから上って来ると見て取ることができるのです。ですから「**海**」というのは恐らくここでは「**底知れぬ所**」を指しているのでしょう。

２．「獣」

１）獣の正体

（１）「にせキリスト」

　では、そこから上って来る１匹の獣について考えてみましょう。実はこのことも我々は黙示録１１章の中で既に学んでいます。先ほどから見ている黙示録１１：７に「**彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。**」とありました。出て行ってイエス・キリストの福音を語るふたりの証人を殺すのが、この「**底知れぬ所から上って来る獣**」であって、これはにせキリストであるということを我々は既に見て来ました。この「**獣**」というのは、世界のリーダーとして力を持っている存在、にせキリストです。

①　サタンとの類似点　黙示録１２：３

　１３章のきょうのテキストを見ると、この「**獣**」に関してより詳細な説明がなされています。１節を見てください。「**また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。**」とあります。まず皆さんに気づいていただきたいのは、この「**獣**」に関する説明が非常にサタンと類似しているということです。黙示録１２：３にサタンがどのような存在であるかが説明されていました。「**別のしるしが天に現われた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。**」とありました。「**七つの頭と十本の角**」を持っていると。１３：１でこの「**獣**」も「**十本の角**」を持っていて「**七つの頭**」があると説明がなされていました。大変似通っています。そこで、レオン・モーリス先生はこの「**獣**」とサタンに関して「彼はサタンと同様に十本の角と七つの頭を持ち、両者とも同じ外見である。すなわち地上に見られる悪は悪魔のコピーにすぎない。」と言っています。今私たちが見て来たのは「**獣**」とサタンが非常に類似していて、サタンが神に逆らい続けるものであるように、「**獣**」も同じ働きをなすということです。

　そしてもう一つ言えることは、この「**底知れぬ所から上って来る獣**」、にせキリストは、悪魔また悪霊たちの力を受けて働きをなす存在だということです。この後１３章の中を見て行くと、このにせキリストは大変な力を持っているゆえに多くの人々を惑わし、人々が彼自身を崇拝するようになって行く様子が書かれています。彼はサタンと関係していて、サタンからそのような力が与えられているということをぜひ覚えてください。

②　サタンとの相違点　黙示録１２：３、ダニエル７：２４、ダニエル７：８

　１節を見ると、確かにこの「**獣**」、にせキリストとサタンとの類似点を見るのですが、同時に相違点もあります。その相違点は、この「**獣**」がサタン自身ではないということを意味するわけです。それはどこにあるかというと、先ほど１２：３を見た時に、サタンは「**七つの頭と十本の角**」を持って「**その頭には七つの冠**」があったと記されていました。１３章を見ると、「**十本の角と七つの頭**」がある、ここはいいのですが、その後「**角には十の冠が**」あると書かれています。サタンのところでは「**七つの頭**」に「**七つの冠**」をかぶっていたけれども、この「**獣**」は「**十本の角**」に「**十の冠**」があったと記されています。冠をかぶっているのは角であって頭ではありません。

　聖書において「**角**」というのは強さや力を象徴しています。ですからこの１２：１の「**十本の角**」というのは、にせキリストのもとで働く、支配する１０人の王たちの偉大な力を表しているのです。実はこのことは黙示録１２：３で既に学んだのですが、ダニエル７：２４にも「**十本の角は、この国から立つ十人の王**」であると記されています。ですから、ぜひ皆さんの頭に入れていただきたいのは、にせキリストがいて、そのもとに１０人の王たちがいるということです。その王たちが大変な力を持っているということをこの１３：１が私たちに教えてくれるわけです。今紹介したダニエル７：２４が、その後このように続いていることに注目していただきたいのですが、「**十人の王。彼らのあとに、もうひとりの王が立つ。**」と書いてあります。１０人の王様がいるのですが、そこにもうひとりの王が出て来るという話です。「**彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。**」とダニエル７：２４は続きます。またダニエル７：８を見ると、「**私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた**」ことが書かれています。これがにせキリストそのものの話です。ダニ

エル７：２４の「**ひとりの王**」、またダニエル７：８の「**小さな角**」、どちらもにせキリストの話です。先ほどから見ているように、このにせキリストはサタンと大変類似しています。レオン・モーリス先生は「獣はサタンと密接に結ばれ、実に受肉した悪のような存在である」と、まさにサタンが肉体を持って来たような存在であり、大変な悪をなす存在だと言うのです。

そして１３：１の最後のところに「**その頭には神をけがす名があった。**」とあります。このにせキリストがこの世に遣わされて来るのは、神の計画にことごとく反対するためです。この地上で、神の計画がなされることを何とか阻止しようとします。そのような存在ですから、当然彼の頭には神を汚す名があった。ただ神の名を汚したのはこの人物だけではなく、実は「**頭**」ということばを見ると、この１節に我々が既に見て来た「**七つの頭**」が存在すると記されています。これまでに存在した王国の話でした。エジプト、アッシリア、バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、そしてローマ、これで六つあります。そして七つ目の王国はこのにせキリストが築くものです。最後のにせキリストによる帝国は１７：９から出て来ます。どれを見ても、それぞれの帝国はみんな神の名を汚すものでした。確かにその中にあって神がある人々に働かれて、神の偉大さを示すといったことはありました。でも基本的に、例えばあのエジプトを見てもイスラエルにことごとく逆らって来た。ですから確かに１３：１で言うように、このような「**頭**」はことごとく神に逆らった。そして最後のこの七つ目の「**頭**」、この王国も同じように神に対して大変な悪を行なう、神に逆らうものであるということを見て取ることができます。マッカーサー先生がおもしろい表現を使っています。このヨハネの幻に関して「竜であるサタンは、このにせキリストを呼び寄せる。それが海から一匹の獣が上って来たと描写されていることだ」と。ここに記されていることは、サタン自身が「**底知れぬ所**」からこの「**獣**」を呼び出すと。大変な存在が呼び出されて来るのです。そして大変なことがこの地上に起こるということです。

（２）「ローマ帝国」

この「**一匹の獣**」は、にせキリストであると言えると同時に、この「**獣**」はローマ帝国を指しているとも言われます。先ほどから何度も紹介しているダラス神学校の学長でもあったジョン・ワルボード先生は「この獣がローマ帝国の再来を指している。」と説明します。彼が挙げる理由は、この黙示録の表現がダニエル７：７－８および黙示録１２：３と１７：３－７に見られるものと類似しているということです。どういうことかと言うと、黙示録１３：２に動物が出て来ます。「**私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口はししの口のようであった。**」、ひょう、熊、しし（ライオン）という三つの動物が記されています。

＊　ダニエルの幻：４つの帝国

旧約聖書ダニエル７：２を見ると、「**ダニエルは言った。『私が夜、幻を見ていると、突然、天の四方の風が大海をかき立て、:3 四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。:4 第一のものは獅子のようで**」、ライオンが出て来ました。５節「**また突然、熊に似たほかの第二の獣が現われた。**」、第二は熊であると記されています。そして６節「**この後、見ていると、また突然、ひょうのようなほかの獣が現われた。**」と。今私たちが黙示録の中で見た三つの動物が、このダニエル７章にも描かれています。この第一の獣「**獅子のようで、鷲の翼をつけていた。**」とあります。ライオンと鷲、これはバビロンを指しています。実際にバビロンの旗にはこのサインが記されています。二つ目の「**熊**」はメド・ペルシャを指しています。三つ目の「**ひょう**」というのは、あの俊敏に動くところからアレキサンダー大王が世界を征服して行ったギリシャを指しています。そして第四の獣に関しては７節「**それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持っており、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。**」と記されているように、この象徴はローマの話です。ダニエル書と今私たちが見ている黙示録に記されている獣が類似している、全くそのとおりであることから、この第四番目の獣がローマ帝国のことであると言うわけです。

そうすると、この「**獣**」を見る時に、にせキリストも確かに「**獣**」です。同時にローマ帝国も「**獣**」と見ることができます。にせキリストなのか、ローマ帝国なのか、どっちなのでしょう？これは両方なのです。マッカーサー先生は「獣は王国と人間の両方を象徴しているものとして理解しなければならない。」と言われます。なぜかというと、王国には必ず王がいるからです。新しいこのローマ帝国に王がいるわけです。このにせキリストです。その証拠としてもう一度黙示録１３章に戻っていただくと、１３：１の後半部分、「**角**」や「**頭**」の話です。見て来たように人物ではありませんでした。これは王たちの話です。そして１３：１の後半にはこのように王国を象徴している表現が記されていました。またこの「**獣**」が人間であるという証拠は、「**獣**」に関しては常に「彼の」とか「彼」という人称代名詞が使われているということです。そのことからその「**獣**」というのはこの王国のことであり、同時ににせキリスト、人間のことであると、そのように私たちは見て取ることができるのです。

◎　にせキリストについて整理しよう：「平和に使者」のよう　６：２

ここで少しにせキリストについて整理したいと思います。
というのは我々はもう６章からずっとこのことについて学んで来ているのです。まず６章の中で白い馬とその乗り手が出て来ました。神のさばきの前に平和があると私たちは学んで来ました。つまりにせキリストは最初に平和を約束するわけです。第二の馬と乗り手は地上から平和を奪い取って行くことを見て来ました。ですからまず最初に平和があると。ではどのようにしてそれが実現するかというと、それがにせキリストなのです。
ダニエル９：２７「**彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び**」、まずここに出てきているのは、このにせキリストはイスラエルと契約を結ぶという話です。その契約を結ぶことによって何が起こるかというと、「**半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。**」と書いてあります。これはそれを人々が行なっているということです。新解約聖書はこのように書いてあって、読むと少しわかりづらいのですが、口語訳聖書を見ると「**彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう。**」となっています。にせキリストはまずイスラエルと契約を結び、イスラエルに平和を、世界的な平和を約束します。そしてイスラエルに神殿を建てることも、再びいけにえを捧げることも許可するのです。ところが患難時代の３年半たった時に、それが一変します。このにせキリストは契約を破棄して、彼らがいけにえを捧げることができなくなるだけではなくて、今度はにせキリストを拝むようにと命じるのです。このにせキリストに関してそういうことが起こるということを皆さんしっかり覚えてください。

２）獣の権威　２節

（１）ローマ帝国の特徴

さて、もう一度黙示録１３章を見ると、「**獣**」、にせキリストが「**底知れぬ所**」から出て来て、この新しいローマ帝国が誕生すると、この「**獣**」の権威というものが２節に記されています。「**私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口はししの口のようであった。**」と、これはローマ帝国の特徴を表しています。「**ひょう**」、「**熊**」、そして「**しし**」です。「**ひょう**」の俊敏さ、また並外れた力、「**熊**」です。強さと力を表すライオン、こういったものをすべてこの第四の獣は兼ね備えているという話です。ですからこの第四番目の海から上がって来る獣はこれまでの獣とははるかに違って、大変恐ろしい存在だと。実はそのことをダニエルが教えてくれるのです。ダニエル７：７、第四の獣の話です。「**その後また、私が夜の幻を見ていると、突然、第四の獣が現われた。それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持っており、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。**」、またダニエル７：１９「**それから私は、第四の獣について確かめたいと思った。それは、ほかのすべての獣と異なっていて、非常に恐ろしく、きばは鉄、爪は青銅であって、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。**」と同じような表現です。でも少なくとも言えることは大変な力を持った存在、恐ろしい存在だと。
ジョン・ワルボード先生は、この第四の帝国についてこんな説明をしています。「第四の帝国はこれらすべての要素と性格を備え、それ以前の帝国よりその力と神を汚す点においてはるかに恐ろしいものであった。多くの者が指摘しているように、ここに選ばれている動物は大患難時代に再来するローマ帝国にふさわしいものであり、ししのような威厳と力を持ち、熊のような強さと粘りを持ち、そしてひょうのような速さを持っている。このような強さの自然的な象徴の上にサタン自身である竜から与えられる悪魔的力の要素が加えられている」と。世界を征服したこれまでの帝国よりもはるかに力を持ち、はるかに恐ろしい。もっと言えばはるかに悪にあふれた帝国であると。
ダニエルはこのことについて８：２４－２５でこんなふうに言っています。「**彼の力は強くなるが、彼自身の力によるのではない。彼は、あきれ果てるような破壊を行ない、事をなして成功し、有力者たちと聖徒の民を滅ぼす。彼は悪巧みによって欺きをその手で成功させ、心は高ぶり、不意に多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる。しかし、人手によらずに、彼は砕かれる。**」と。もちろんこの預言というのは、アンティオコス四世のエピファネスのことです。ところがダニエルはこれだけではなくて、将来患難時代に訪れるこのにせキリストのこともこのように記すわけです。大変な力を持っている、「**あきれ果てるような破壊を行な**」うと。
なぜこのようなことができるのか――。黙示録１３：２の後半に「**竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。**」と書いてあります。これが原因です。このにせキリストがこれまでにない、だれも行なったことがないような力をもって、不思議をもって、働きをするわけです。サタンがかんでいるからです。しかも「**自分の力**」、サタン自身の力です。また「**自分の位**」、サタンの王座です。自分の「**大きな権威**」、サタンが持っているこの世の神としての権威をこのにせキリストは用いて働くことができると言うのです。何となく「**自分の力と位と大きな権威とを与えた**」と言うと、サタンがその権威等を委譲して自分はしないかのように思うのですが、とんでもない、ここで言われていることは、サタンの働きがこのにせキリストを通してなされて行くということです。このにせキリストはまさに「**竜**」であるサタン

の代理人です。この人物を通してサタンのわざがなされて行くのです。
　パウロはそのことに関してこんなことを言っています。「**不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。**」、Ⅱテサロニケ２：９－１０です。にせキリストの到来というのは「**サタンの働きによるのであって**」、このにせキリストは「**あらゆる偽りの力、しるし、不思議**」を行なうと。そしてますます人々を惑わして行くと。
　一体どういうことが起こるのか――。我々は今この黙示録の中から見て来ました。このローマ帝国が再建された時に、そこに「**十本の角**」がある、１０人の王様がいると見て来ました。恐らく彼らは政治的にも軍事的にも大変な力を持っているリーダーたちでしょう。みことばを見ると、その１０人の間にひとりの人物が出て来て、３本の角が抜かれてしまうという話がありました。恐らく皆さんもどうしてこんなことが起こるのか、そのにせキリストの策略がどういうふうにして起こるのか、大変な疑問でもあったと思います。なぜかというと、このにせキリストが影響力をどんどん拡大して、帝国全体を支配するだけではなく、この支配は全世界に及ぶわけです。これまで見て来たさまざまな帝国というのは全世界ではなく、一部の世界を治めていた。ところがこのにせキリストは一部ではなく全世界をその手中におさめるのです。このプロセスにおいて３人の王たちがその座から追われて行く。なぜこのリーダーはこんな地位にまで上り詰めることができるのか――。
◎　どうしてこのにせキリストがこの世界でリーダーとして上り詰めることができるのか。
　実はこの学びをしている時に、なるほどと思えることがあったので、それを最後に皆さんに紹介して終わりたいと思います。マッカーサー先生がレミーという人の教えを引用して、実はこのことを説明しています。このにせキリストという人物がどういう人物なのか、恐らく皆さんにとっても参考になると思います。こういう人物だからこのような権力を手中にすることができたと。
①　天才的政治家　ダニエル７：８
　一つ目に言えることは彼は非常に天才的な政治家であると。皆さんに見ていただきたいのはダニエル７：８です。実はそのことをダニエルが教えてくれています。「**私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。**」、この「**引き抜かれた**」ということばなのです。このことばを聞いた時に、強制的にとか強引さを印象づけられます。ところがここで使われていることばは「徐々に後退して行く」ということばです。この「**引き抜**」くとは、強いものが古いものを押し出して行くことによって、古いものが徐々に消えて行く様子を表しています。だから一瞬のうちにではなくて徐々にそうなって行くという話です。ですから、このにせキリストは政界に現れて、何かを突然なすのではなくて、その影響力が徐々に徐々に広がり、そしてどういうわけかこの３人の王――これがだれなのかわかりませんが――がその責任のある立場から追いやられると。非常に巧妙に働く存在で、政治家として天才的な人物であると。
②　知力において天才　８節
　二つ目に言えるのは、知力において天才である、非常に頭のいい人物だと。８節を見ると、「**よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、**」と書かれています。この「**目**」というのは、洞察力を表すのです。それは知性とか知能を表します。彼は非常に賢く、判断が正確で博識であると。つまり彼はアドバイスを与えることができるのです。問題を解決することができるのです。どれだけこういうリーダーが今必要とされているでしょう。問題を解決してくれる人、まさにこの人物はそういう人だったのです。今世界じゅうに問題が山積しています。一体だれがこういう問題を解決してくれるのか、この人物は非常に知力において天才的な人物であると。
③　話術の天才　８節
　三つ目は８節の後半「**大きなことを語る口があった。**」とあります。このにせキリストの三つ目の特徴というのは話術における天才です。「**大きなことを語る**」、恐らく彼はすばらしいことを語るのでしょう。非常に言葉巧みに人々に働きかける。それにおいて天才的な人物だと。
④　戦略の天才　２３節
　四つ目に、７：２３を見ると「**第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。**」とあります。恐らくここで言われていることは戦いの話です。つまりこのにせキリストは戦略における天才、戦いにおける天才です。戦いに勝つ方法において天才的な人物です。だんだん世の中はそうなっていますよね。どうやってテロと戦うのか、どうしていいのかわからないのが現状です。しかしこの人物が現れるとそういった問題を解決することができる。今現在イスラムの寺院が建っているあのエルサレムの中の神殿で、いま一度ユダヤ人たちがいけにえを捧げるなんて、この人物はよっぽどうまくやらないとそんなことは不可能です。こういった分野において大変天才的な人物でなければこんなことは起こり得ません。イスラエルに行かれた皆さんが一番感じている

のは、どうやってここでいま一度いけにえが捧げられ、ユダヤ人が礼拝を行なうのかということだと思います。人間的には考えられないのです。でもこの人物はそれをやるのです。このにせキリストはそういう人物なのです。

⑤　経済の天才

第五番目はこの人物は経済における天才です。今の世の中において、どこかの国が経済的におかしくなると、全世界に影響が及ぼされる。我々は何回もそれを経験して来ています。今必要なのはそういう経済における天才です。恐らくこの人物がそうなのでしょう。

⑥　宗教の天才

そして最後に宗教の天才。恐らくこの人物は非常なカリスマ性を持って世界の偉大な宗教的なリーダーのように見えるのでしょう。なぜかというと、最終的に全世界が彼を崇拝するようになって来ます。

こうしてにせキリストとはどういう存在なのかを見て行くと、こういう人物だから今我々が見て来たようなことを可能にしたのです。こういう人物だから人々を惑わし、あたかも彼がこの世界に平和をもたらす人物、この方がまさに世界の救世主であるかのように見せるわけです。だから彼はにせキリストなのです。本物のキリスト、救世主ではない。偽りなのです。しかし、非常に巧みに彼こそが待望の救世主であるように全世界に明らかにして行く。この後私たちが見て行くのはこの偽りの救世主がなすさまざまな不思議のわざです。これによって人々はますます混乱の中に陥れられて行きます。それもすべてサタンが彼を通して働きをなすのです。

こうしてサタンは神のなされる計画を何とか阻止し、神の約束された王国がこの地上に来ないことを願って働き続けるのです。でも感謝なことに主の計画は必ず成ります。サタンがどんなに抵抗しても神のみこころは必ず成る。主は勝利をもたらされます。こうして私たちがこれから何が起こるのかを見た時に、私たちが繰り返し覚えなければいけないことは、我々は真理を知った者としてそれを伝える責任があることは明らかです。何が起こって行くのか、みことばは明確に教えてくれている。こういう時代になって行くし、こういう世界になって行くし、こういうことが起こって行く。私たちはそれを知った者としてそれを語って行くことです。同時に、我々はきょうという日をむだにしてはいけないということです。なぜならこのすべてのことが起こる前に、我々は主イエス・キリストのもとに召されるわけです。主の前に私たちは引き上げられて行くわけです。今、もうこの舞台は整いつつあります。ということは主が私たちを迎えに来てくださる日はもっと近いということです。その間、しっかりと地上でなすべきことをなして、いつイエス様にお会いしてもいい、悔いのない生活を送っておられますか？この真理を知った私たちはそのことをみずからに問いかけることです。私たちの人生が本当に主の前に価値ある歩みをしているのかどうかです。主にお会いできるそんな日々を過ごしているのかどうか。もし違ったらきょう悔い改めてそのような歩みを始めることです。主に会う備えを我々信仰者もしなければいけない。そして私たちはそのような者として、この世の人々に対して主に会う備えをしなさいというメッセージを発して行くのです。そのようにしてこの一週間歩んで行きましょう。

《考えましょう》

１．「海から上がってくる獣」について説明してください。

２．「竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた」について説明してください。

３．「竜」が「獣」を用いて達成したいことは何ですか？

４．きょうのみことばからあなたは何を学ばれましたか。それをどのように日々の生活に適用して行かれますか。信仰の友と分かち合い、励まし合って実践に励んでください。